＜総括研究報告＞

親子のこころの諸問題に関する研究

主任研究者　　松井　一郎[1)]

要約：親子関係の障害などが関与する小児疾病を医学・家庭社会病理の視点から分担研究した。被虐待児予防対策とフィールド研究による虐待予備群の予防の可能性、マニュアル検討を検討した。小児心身症発症の背景因子を解析し、対応策を策定した。学習障害の定義を明かにし、中枢性障害と介入効果を検討した。病児をもつ家庭のきょうだいへの影響、親への心理・経済・社会的影響を調査した。先天異常症候群の有病率、自然歴と医療・療育の方法の調査を開始した。

見出し語：被虐待児症候群、小児心身症、学習障害児、病児ときょうだい、先天異常の自然歴

【研究の背景】

近年、小児の生育環境が大きく変化し、こどもの生活に影を落している。こどもと親が変化に適応できない時には軋轢が生じ、子供の健全な心身の発達が損なわれる。近年特に問題とされる児童虐待や心身症・登校拒否の増加などは、親子関係失調・家庭病理・生活環境病理の進行を意味する。これらの問題はすでに多くの指摘や研究もあるが、個別の論議に留まった。

未曾有の高齢化社会を目前にしたわが国は、社会の支柱となる子供達の健全育成のため、子供達の周りの病理現象を解明し早急に取り除くことが急務である。特に"親子のこころ"に代表される多要因の病理と疾病は、個別研究課題と同時に病因や対応策の共通性、連続性を集約できる総合的な研究体制を組む必要がある。

【研究目的】

本研究は、身体及び心理的症状を発症する小児疾患につき、下記の４課題を指定し、本邦における実態を把握し、医学的要因、家庭環境要因、社会的要因、発生機序を解析し、予防対策、治療方法、対応策を検討する事を目的とする。

1．被虐待児予防の保健指導に関する研究（松井一郎）
2．小児心身症に関する研究（星加明徳）
3．学習障害に関する研究（長畑正道）
4．病児を抱える家族の問題に関する研究（鈴木康之）
5．先天異常疾患の成因と自然歴およびトータルケアに関する研究（黒木良和）

1)国立小児病院・小児医療研究センター・小児生態研究部
(Dept. Child Ecology, National Children's Medical Research Center)

【研究の重点】

指定課題の研究進行について、個人の素因の医学的解析に加えて親子関係、家庭や生活環境の病理の解明を重視し、また課題間の連続性を考察する事が重要である。例えば虐待者の母親の生育歴で小児期の親子関係の失調、心身症などをしばしば経験するが、このことは小児期の心身症の増加は将来の児童虐待の増加を示唆しており、かかる視点をもつ研究が重要である。

第２は対照とする疾患と病理事象の要因解析で、家庭や生活環境などの変化と疾病発生との関連を明らかにする事である。解明された疾病要因の条件を改善すれば、予防や発症防止の方策が可能となる。診断や治療法の研究と並行して、育児環境、親子関係、家庭生活や教育環境などの背景因子を調査し発症との関連を明かにし予防対策に生かす事が要請されており、予防医学の視点が重要である。

【研究計画】

分担研究１．虐待ハイリスク家庭に対し、予防的保健指導とその効果判定を行い、地域の予防システムを策定する（虐待予防班）。

分担研究２．小児心身症の実態調査から発症時の背景因子を解明し、医療機関での対応策を考察・提言する（小児心身症班）。

分担研究３．学習障害の診断基準を明確にし、病因(中枢性障害)の解明、病型に対応した訓練などの介入効果を明かにする（学習障害班）。

分担研究４．小児が疾患に罹患した時のきょうだいや家族への影響を明かにし、家族支援対策を検討する（病児きょうだい家族班）。

分担研究５・主な先天奇形症候群の有病率と自然歴を調査し、自然歴に応じた医療と療育の方法を研究・提言する（先天異常自然歴班）。

【研究経過】

本研究班は初年度平成５年で本年は２年目に当る。先天異常自然歴班は本年が初年度である。

親子班の研究実施計画(案)の提出後、分担研究者会議(H.6.8.3)で 研究実施について意見交換を行い、各分担研究課題に設定されたリサーチクエッションに沿って、分担班ごとに調査研究を開始した。後期に４分担班合同の研究報告会を開催し(H.6.2.18)、各分担班にまたがる共通の問題の討議を含め報告とまとめを行った。

【研究結果】

研究結果をリサーチクエッションに従って要約すると以下である。

［1.虐待予防班］

①虐待予備群への対応による虐待予防の可能性：大阪府下全域（都市型）、和歌山県全域（農村型）、逗子市（単位自治体）をフィールドとし母子保健活動を中心に予防・対応を検討し、ハイリスク段階での活動と早期介入の有効性が示唆された。

②ハイリスク対応や地域関係機関および育児指導等を含めたマニュアルの作成：虐待は殆どの例で再発が起るが少数ながら成功例が存在するのでその経験から得られたノウハウを中心にマニュアル作成に取り組んでいる。

［2.小児心身症班］

①心身症発生の社会的因子：学校内背景因子は

72%、家庭内背景因子は73%、両者がみられたもの52%であった。

②心身症への対応策：学校内因子、いじめへの積極的介入は重要、カウンセリング、人間関係の調整の他、養護教諭・学校と医療機関の連携、教諭の医療現場における研修など。家庭での背景因子の対応は、親の養育行動の問題がみられ種々の支援が必要。そのためには小児科・内科医に初期対応の教育が重要、かつ専門医への連携を可能とするシステムを構築すること。

［3.学習障害班］

①診断基準：全米学習障害合同委員会などの定義を基本としてわが国の実状合うよう検討する。

②中枢性障害について：学習障害の概念での共通認識はは発達性の異常で中枢性の異常である。

③学習障害への対応：就学前と在学中の介入があり、指導システムを明確化する方針である。

［4.病児きょうだい家族班］

①きょうだいへの影響：心理的身体的問題を高頻度に生じ得る。

②親への心理･経済･社会的影響：母親の介護（入院時の付添いや通院児の介護）、家事負担が大きい。入院の付添いが条件となる場合は特に負担が大きい。

③家族の疾病受容の支援：援助システムのきめ細かな対応が必要である。

［5.先天異常自然歴班］

①先天異常症候群の有病率：ダウン症との対比から症候群の有病率を推定しﾌﾟﾗﾀﾞｰｳｨﾘｰ症候群などが高かった。

②自然歴：共同調査用紙を作成し検討に入った。

③成因の究明：個別研究を行なっている。

【考察と展望】

”親子のこころの諸問題”は医学のソフトウェアの研究課題であるが、この領域の研究と進歩は遅々としている。”こころ”や行動の物質的基礎の研究が緒についたばかりで方法論の制約がある。親子班の諸課題は、慢性の多因子性社会難病、これと近縁の状態で、複雑な社会家庭病理背景をもち発症する。今日の生活変化の過半は不可避的であって、病理の進行は容易には止められず、その点では簡単な処方箋はない。

しかし、要因と発症機構が把握できれば発症の前段階で予防的対応も可能で、虐待予防班ではこの段階に達した。初期消火が可能となった。他の分担班においても課題の基礎整備(ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ化など)が進み要因解析から対応策、予防策の論議が進められ、進展が期待される。

【今後の課題】

各分担班で実践的な研究を意図して、診断基準の統一、ハイリスクリスト、実態把握、指導方法の開発、マニュアル作りなどを行ってきたが、残された課題が多い。社会要因解析の難しさと同時に、これまでかかる視野の研究がなされなかった為であろう。各研究班から課題と提言が出されており、そのひとつずつを研究、検討、実施する必要がある。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:親子関係の障害などが関与する小児疾病を医学・家庭社会病理の視点から分担研究した。被虐待児予防対策とフィールド研究による虐待予備群の予防の可能性、マニュアル検討を検討した。小児心身症発症の背景因子を解析し、対応策を策定した。学習障害の定義を明かにし、中枢性障害と介入効果を検討した。病児をもつ家庭のきょうだいへの影響、親への心理・経済・社会的影響を調査した。先天異常症候群の有病率、自然歴と医療・療育の方法の調査を開始した。